

花粉類を餌としたときの土着カブリダニ類の発育・産卵

○岸本英成（果樹研カンキツ）

カブリダニ類は、現在日本国内に90種以上が報告されており、ハダニ類、フシダニ類やアザミウマ類等微小害虫に対する有望な天敵として期待されている種を多く含む。近年、農生態系内や作物上に生息する天敵類の保護・増強といった積極的な天敵利用技術の開発の研究が進められており、代替餌の供給はその中心技術の一つと考えられている。花粉類は古くからカブリダニ類の主要な代替餌候補として知られており、その有効利用に向けて各種カブリダニにおける各種花粉の餌としての適合性データを蓄積する必要がある。そこで、果樹園及び周辺植生で多く観察される土着カブリダニ種（ニセラーゴカブリダニ、ミヤコカブリダニ、ケナガカブリダニ、コウズケカブリダニ、フツウカブリダニ、ミナミカブリダニ、ケプトカブリダニ（以下カブリダニ略））を用いて、各種花粉を餌としたときの発育・産卵状況を調べた。

まず、野外から直接採集した花粉類として、これまで良好な代替餌としての可能性を指摘されているチャ花粉、西南日本において果樹園の防風樹として多く植栽されているイヌマキ花粉、果樹園の主要下草類であるイネ科植物の代用としてトウモロコシ花粉を供試した。チャ花粉を餌としたときは、いずれのカブリダニ種もよく発育、産卵した。一方、イヌマキ花粉では、種によって発育・産卵状況が大きく異なった。すなわち、ニセラーゴ、フツウはチャ花粉と同程度の良好な発育、産卵を示し、ミナミもほとんどの個体が発育、産卵可能であった。一方、ミヤコ、ケプトの発育率、産卵率はきわめて低く、さらにケナガ、コウズケは全く発育、産卵できなかった。また、トウモロコシ花粉では、コウズケ以外の種は発育、産卵可能であった。しかし、ミヤコ、フツウ、ケナガ、ケプトでは、チャ花粉の場合に比べて、発育日数がきわめて長く、産卵数がきわめて少なかった。以上から、チャ花粉は多くのカブリダニ種にとって良好な代替餌である一方で、イヌマキ花粉は代替餌として有効な種に限られること、トウモロコシ花粉は比較的質の低い代替餌であることが示唆された。

さらに、大量入手が容易である受粉用市販ナシ花粉を餌としたときのミヤコ、ニセラーゴの発育・産卵特性も調べ、代替餌としての利用可能性を検討した。ミヤコに市販ナシ花粉を与えた場合、幼若虫期間はチャ花粉よりも長かったものの、産卵数はチャ花粉よりも多く、有効な代替餌と考えられた。一方、ニセラーゴにナシ花粉を与えた場合、幼若虫期間はチャ花粉と同程度だったものの、産卵数は少なくなり、代替餌として利用可能なもののやや質の低い餌であった。